

## 魔女と王様

とつても小さな九つの国——3

あわなみりようさく

### 31 三匹の大蛇

「大蛇だ！」

エリユーが言います。ゲヌーイがはつとした顔を向けます。

「はつはつは。まさか、大蛇はあんなに小さくはないよ」

ニーダマが笑いながら言いました。その一方で、ニーダマは思いました。あの程度の大きさの大蛇なら怖くはないぞ。のろまそうにも見える。だが、普通の蛇に比べれば遥かに大きいのはまちがいあるまい——。

「大蛇です。蛇です。私たちを襲ってきたのです！」

家来のひとりが、怯えた声を上げました。ニーダマはここぞとばかりに勇気を奮い起こしました。

「よし。私が退治してくれよう。エリユー、エリユー！ その剣を私に！」

エリユーはびくりとして戸惑った顔を浮かべながらも、自分の剣を差し出しました。剣を受け取ると、ニーダマは目にも止まらぬ早さで走り、小さな大蛇の腹をめがけて剣を突き出しました。

ぶすり！ と、剣は簡単に大蛇の腹を貫きました。もんどりうって倒れる大蛇の背後には、もう一匹の、もう少し小振りな大蛇がいました。ほら穴の中からは見えませんが、ニーダマの眼にはいかにもものろまそうに、簡単に退治できそうに見えたのです。

「えいやーっ」

ニーダマは威勢よい声を張り上げて突進します。そして、

「おのれ、大蛇めーっ」

と叫びながら大蛇に切りつけました。腹を切り裂かれた大蛇が地面に崩れ落ち、血の混じった水しぶきがニーダマにかかります。大蛇の息の根が止まっていることを確かめたニーダマが顔を上げると、その背後には、もう一匹のさらに小振りな大蛇がいました。

自分の強さに自信を持ったニーダマは、その大蛇にも切りつけました。

そして、あつけないほど簡単に、ほら穴の入り口には三匹の蛇のむくろが積まれたのでした。

「すごい——」

ほら穴から出てきたエリユーが言います。他の家来たちも盛んにうなずきあっています。その中に、青白い顔を浮かべている者が二人いました。

そう、ゲヌーイと、最初に嵐のことを言い出した男ナブコです。二人は膝に手をつけて肩で息をしているニーダマの姿を見ると、何か決心を固めたようにうなずき合い、腰の剣に手をかけます。

同時に、二人が声を上げました。

「おのれー！」

「にせ王子めー！」

二人は両手で握りしめた剣を頭上に掲げ、ニーダマの背後から襲いかかったのです！

〈つづく〉